ブリンプ大佐の頭の固さ

――オーウェルの著作に見られる 'Blimp' の使用例について――

川　端　康　雄

I　「ブリンプ大佐」と「保守反動の徒」

ホメロスの叙事詩，とりわけ『オデュッセイア』は私の偏愛する物語のひとつであり，おりにふれて味わい親しんでいる。私にとってこの叙事詩の魅力はいろいろあるが，その一要素となっているのが，「エピテトン」(epitheton) という物語中でくりかえし使われる形容語句（一種の枕詞）である。「脚の早いアキレウス」「知略に長けたオデュッセウス」「眼光輝く女神アテーネー」「中のうつろな船」「翼ある言葉」「葡萄酒色の海」などのように，キャラクターや事物につけられる。これが独特な雰囲気とリズムを作り出している。松平千秋によれば，ホメロスの近代語訳は，エピテトンを逐語訳するのと，意訳してしまうのと，二つの類型に分かれるのだそうである[(1)]。松平訳はもちろん前者のタイプであり，たとえば夜明けの表現としてくりかえし出てくる表現は「朝のまだきに生まれ，指薔薇色の曙の女神が姿を現わすと」[(2)] としている。ところが後者のタイプはこれを意訳して「朝になると」としてしまうわけである。私は断然前者の訳し方を支持する者である。たしかに夜が明けたという情報が第一なのであるし，翻訳を簡略にしてコンパクトな本にできるのは便利なのかもしれないが，それでも，薔薇色の指をした曙の女神が東の空にあらわれるというイメージをとばしてしまうと，ホメロスの詩の大事な部分が抜け落ちてしまうと思える。「朝になると」など訳してしまったら，魅力が半減する。ひどく味気なくなる。

とはいえ，私自身が翻訳を手がける場合に，必要上後者の訳し方ですませ

てしまうことがたまにある。むろんそれは散文のテクスト，とくにエッセイの場合である。イギリスの作家ジョージ・オーウェル（1903-50）のエッセイの翻訳で，私はいまでも心に引っかかっている例がある。以下がそうである。

> 国際旅団でいさましく戦死したこの若き共産主義者〔ジョン・コーンフォード〕は，骨の髄までパブリック・スクール的だった。忠誠をつくす相手は変えたが，感情は変えていなかったのだ。それでどういうことが証明されるのだろうか。たいしたこととは言えないかもしれないが，こういうこと――つまり，こちこちの保守反動の徒を社会主義者に豹変させることは不可能ではない，ということ。忠誠心にはその対象をくるりと変える力が内在している，ということ。さらに，愛国心とか軍人にふさわしい徳性を人が精神的に必要としている，ということなのだ。こうしたものを左翼の腑抜けどもがどんなに嫌おうとも，それらに取って代わるものは，いまだにみつかってはいない[3]。

オーウェルの1940年のエッセイ「右であれ左であれ，わが祖国」の拙訳の最終段落にふくまれるくだりである。このなかの「こちこちの保守反動の徒を社会主義者に豹変させることは不可能ではない，ということ」の部分が問題で，その原文は ‘the possibility of building a Socialist on the bones of a Blimp’ となっている。直訳するなら「ブリンプの骨の上に〔ブリンプの骨格をもとにして〕社会主義者を作る可能性」ということになる。単に「ブリンプ」としただけでは日本の読者にはほとんどかわかってもらえないだろうという理由で「こちこちの保守反動の徒」と意訳したのだった。「ブリンプ」というのは当時人気があった風刺漫画のキャラクター「ブリンプ大佐」（Colonel Blimp）に由来する。そのキャラクターの性格を端的にいえばその意訳のとおりになるのだから，別段これは誤訳というものではない。とはいえ，「ブリンプ」とそのまま訳語をあてておいて，割り注で説明を加える手を使った方がよかったのかもしれない，といまは少し後悔している。たとえば，『ウィガン波止場への道』（1937年）の日本語訳はそのやり方を採用している。これはオーウェルが「ブリンプ（大佐）」という語を用いたおそらく最初の使用例である。

かりにブルジョア「知識人」相手に，愛国心や作法や出身校気質（かたぎ）やブリンプ大佐〔漫画家のデビッド・ロウが創作した保守派の権化〕といったもののことを笑えるようになると，自分は非ブルジョア化したと思いこみやすい。しかし少なくともブルジョア文化のまったく外部にあるプロレタリア出身の「知識人」の見地からすると，ブリンプ大佐とブルジョア「知識人」は，その違いよりも類似性の方が問題になるかもしれない。プロレタリア「知識人」が，ブルジョア「知識人」とブリンプ大佐とをじっさい同類の人間だと見なすことはおおいにありうる。「知識人」の方も大佐の方もそれを認めないであろうが，にもかかわらずそれはある意味で的を射ている(4)。

引用文中の〔　〕内の割り注は訳者自身のものである。このように注記しておけば，「ブリンプ大佐」という語を翻訳で生かしておくことができるわけだ。つぎはオーウェルが1941年に刊行したパンフレット『ライオンと一角獣』の既訳からのもの。

両次大戦間の沈滞はイギリスのすべての人々に作用したが，とくに中産階級のうちの二つの重要な階層に直接的影響をあたえた。そのひとつは一般に「ブリンプ」と呼ばれている軍事的，帝国主義的中産階級であり，いまひとつは左翼インテリである。この一見相反する二つのタイプ，象徴的対立物――恐竜のように太い首と小さな脳をもった退役大佐と，丸い額と鶴のような首をしたハイブラウは精神的に結びついていて，たえず互いに作用し合っている。いずれにせよ。両者はかなりの程度同じ家庭に生まれついている(5)。

この訳文では，注を付さずに「ブリンプ」としても文脈からかなり意味が通るようになっている。

ここで翻訳をめぐる些末な事柄にこだわっているように思われるかもしれないが，「右であれ左であれ，わが祖国」の拙訳は，「ブリンプ大佐」という具体的な漫画のイメージを捨象して「保守反動」という抽象語をあててしまうことによって，微妙な点で抜け落ちるものがあって，それがあとになって

気になってきたのである。これはホメロスの詩の翻訳とくらべればさほど重大なものではないだろうし，訳注で説明して「ブリンプ」としたとしても，漫画の具体的なイメージがなければ，そのニュアンスを日本語で十分に伝えるのはどだい無理であろう。しかし，そうであるにしても，やはり「ブリンプ」と「保守反動」では大いにニュアンスがことなる。「曙の女神」と「夜明け」のちがいのように。

というわけで，気になったものだから，抜け落ちたものの実質が何であるのか，最近調べてみた。その結果，完璧に理解したとは言えないにせよ，前よりはずっとこの「恐竜のように太い首と小さな脳をもった退役大佐」の人柄がわかるようになった。本稿はそれについての一種の作業報告である。以下，「ブリンプ大佐」について，それがいかなるキャラクターであったのか，資料をもとに確認した上で，オーウェルがこの語を用いた意義が何であったのかを考察してみたい[6]。

Ⅱ　デイヴィッド・ロウの造形

まず例によって『オクスフォード英語辞典』（*OED*, 第二版）の定義と用例を見ておく（初版には 'blimp' の項はなし）。'blimp' の項目は二つに大別されている。一つ目は「小型軟式飛行船」の意[7]。初出例は 1918 年のものがあげられている。そこからの転義として「映画撮影機の防音カヴァー」[8]を意味する業界用語が出てきたという説明も添えられている（初出は 1936 年）。二つ目がここで問題になる「ブリンプ大佐」にかかわる用法である。こう説明されている。

> プリンプ（大佐）――風刺漫画家（カートゥーニスト）・戯画作者（カリカチュアリスト）のデイヴィッド・ロウ（1891–1963）によって創作された人物。でっぷりと太った退役将校として描かれ，新しい思想に根強い憎悪の念を表明する。ここからこのタイプの人物を示す語として blimp が出た。形容詞的にも用いられる[9]。

それに続けてあげられている初出例は，ロンドンの夕刊紙『イヴニング・スタンダード』からで 1934 年 5 月 28 日号の日付が記されている。その例文

は以下のとおり。

> 総理大臣ブリンプ「むろん，君，航空同盟は正しい。軍事的飛行の廃止のためのあらゆる提議にわれわれは反対せねばならぬのじゃ[10]。」

「総理大臣」となっているが，これは仮の姿であって，「大佐（カーネル）」が本来の肩書きである。これからそれを具体的に見ていきたいのだが，その前に，作者ロウ（図1）の経歴について簡単ふれておく。ロウは1891年にニュージーランドのダニーディンに生まれた。少年時代にイギリスから輸入された風刺漫画に刺激されて筆をとるようになり，11歳で早くも最初のスケッチが地元の新聞に掲載された。20歳（1911年）のときには『シドニー・ブレティン』の常連になっていた。第一次大戦後の1919年にイギリスに移住，ロンドンに居をかまえる。すぐに夕刊紙『スター』に連載をもち，1919年から27年まで同紙で漫画を描いた。そのあと『イヴニング・スタンダード』に移籍。社主のビーヴァーブルック卿は保守的な政治観の持ち主であり，急進派のロウとは意見を異にしていたのにもかかわらず，ロウに対しては思う存分好きなことを描いてよいという白紙委任状をあたえたと言われる[11]。結局同紙に彼は1927年から1949年まで，23年間という長期にわたって寄稿しつづけることになる。第二次大戦後の1950年に（ビーヴァーブルック卿が悲しんだことに）労働党系の新聞『デイリー・ヘラルド』に発表の場を移し，1953年に今度は『マンチェスター・ガーディアン』に移り，そこに10年間執筆。1962年にナイト爵を授与され，1963年に没[12]。「20世紀前半にイギリスの新聞で活動した漫画家としてはおそらく最も重要で最大の人気を誇り，そして最も影響力があった人物」[13]だと評価されている。この長い活動期間にロウは多くの登場人物を創造したが[14]，なかでも最も重要なのがブリンプ大佐であることは，いま *OED*[2] の記載を見たように，'Blimp' が小文字の 'blimp' という普通名詞と化して英語の語彙に加わった事実を見れば明らかだろう。

さて，いま引いた *OED*[2] の '(Colonel) Blimp' の初出例は『イヴニング・スタンダード』の1934年5月28日号の文であった。ところが，「ブリンプ大佐」の最初の登場はじつはこれより一月以上前の4月21日号にさかのぼ

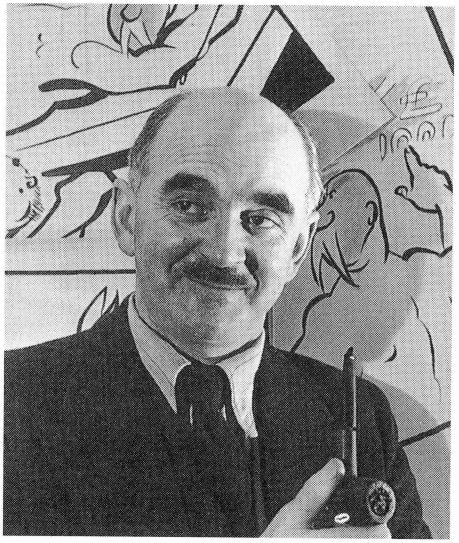

図1　ディヴィッド・ロウ

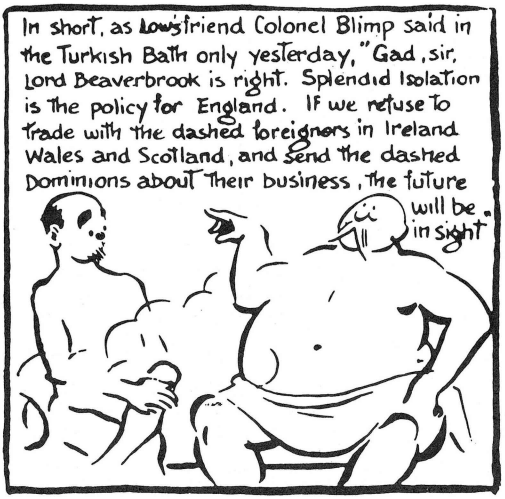

図2　ブリンプ大佐の初登場

『イヴニング・スタンダード』1934年4月21日号

る。図2がその該当部分である。文章の部分を以下に訳出しておく。

> 要するに，ロウの友人のブリンプ大佐がつい昨日サウナ風呂でこう述べたように――「むろん，君，ビーヴァーブルック卿は正しい。光栄ある孤立こそがイングランドにふさわしい政策なのだ。アイルランドやウェールズやスコットランドのいまいましい外国人どもと取引をするのをわれわれが拒み，いまいましい自治領を追い払ってしまえば，先行きは明るいのじゃ」

たしかにここには 'Colonel Blimp' の文字が見えるから，*OED*[2] がわざわざそれよりあとの 'Prime Minister Blimp' という用例を出しているのは不適当であり，こちらに差しかえた方がいいように思える。それはそれとして，図2は「ロウズ・トピカル・バジェット」('Low's Topical Budget'＝「ロウの時事問題の束」の意）という連載欄の一部として見えるものである。これは毎週土曜日の号で一面全部を使って，その週に起こった出来事についてロウが絵と手書きの文章で風刺をおこなう連載であった（これ以外にもロウは同紙に週4日，半ページ分の風刺漫画を供給していた)。そのなかでブリンプ大佐は右下隅，全体の一割程度の小さなスペースに描かれている。1934年4月21日号の初登場以来，1940年3月16日号まで，ブリンプ大佐は主としてこのコーナーに登場したのである(15)。第二次大戦がはじまり，紙不足のためにこの連載はうち切られたが，その後もロウは半ページのカートゥーンでブリンプを用いつづけた。結局戦後の50年代までブリンプは随時登場してくる。とはいえ，「トピカル・バジェット」欄に出ていた1930年代が「ブリンプの全盛期（そしておそらくロウの全盛期)」であったとある論者は断言している(16)。じっさい，1934年の発表直後にあっという間に人口に膾炙したキャラクターであるため，「ブリンプ大佐」は1930年代半ばから1940年初頭まで，つまり戦間期の末期に属する人物という印象が強く残っているように思われる(17)。

他の図を見る前に，図2だけで見てとれることをもう少し解説しておこう。以後の「ブリンプ」の漫画を貫く定型がここですでにあらかた示されている。気がついた順に箇条書きすると以下のとおりである。

(1) トルコ風呂（Turkish Bath）に入っている。
(2) したがって裸である。
(3) 肥満体で首が太い。髪は生えていないが，どじょうひげをたくわえている。
(4) 「友人」のロウ（つまり作者の自画像）を相手に語っている。
(5) その発言は保守反動的である。
(6) しかも発言がいちいち時代錯誤的で愚かしい。

他にさまざまな運動にいそしんだり[18]，あるいは皿回しの曲芸をする姿などで描かれることが多いが，ブリンプの基本的な持ち場はトルコ風呂（ターキッシュ・バス）すなわちサウナ風呂である。このトルコ風呂じたいが，1930年代にはすでに流行遅れになっていた施設であり，それをブリンプが好んで利用しつづけていることに彼の旧弊さがあらわれている。入浴中なので当然裸であり，バスタオルを下半身に巻いているだけである（あと，スリッパをはいていることが多い）。だから「大佐」であることはキャプションからわかるだけであり，絵そのものからは職業は特定できない。作者ロウはブリンプ大佐の漫画によって（多くの人が解釈したように）退役将校という特定のグループの風刺を狙ったわけではなく，「愚かさ全般」[19]を批判しているのだと主張したのだが，こうした裸の匿名的な空間にブリンプを置いていることはその主張を裏書きするものである。

またブリンプは肥満体である。たいていの場合作者のロウ自身がいっしょに登場している。ブリンプにくらべるとロウは痩せている。ブリンプとちがって髪が後方にまだ残っていて，眉毛は濃い（図1とくらべればたしかに自画像であるとわかる）。二人して共通の行動をしながらロウが聞き役に回っている。ロウ自身の台詞はない。時事問題についてブリンプの発言を聞くロウの表情は，あきれているようにも困惑しているようにも見えるが，じっさいのロウはリベラルな左派の人間であり，それにもかかわらず漫画のなかで保守反動的なブリンプ大佐と仲良くつきあい，言いたい放題を言わせているという設定になっているのである。

その発言は保守反動的で頑迷であり，しかも時代錯誤的で愚かしい。図2の例で言うと，「むろん，君，ビーヴァーブルック卿は正しい。光栄ある孤立こそがイングランドにふさわしい政策なのだ（Gad, sir, Lord Beaverbrook

is right. Splendid isolation is the policy for England)」の 'splendid isolation' はヴィクトリア朝末期によく使われたイギリス外交政策を示す語句であり，1934年にこれを持ち出すのは相当な時代錯誤である[20]。「むろん，君」にあたる 'Gad, sir' も古めかしい。'(by) God' の婉曲語形で断言や感嘆の口調を示すものとしてのこの語の使用は1930年代にはとうに廃れていたのである[21]。

以下に典型的な発言をいくつか紹介する。台詞だけではもったいない。図もすべて添えておく。

「むろん，君，ビーヴァーブルック卿は正しい！　平和に多額の金を使っていたりしたら，戦艦を買う余裕がなくなってしまうじゃないか」[22]（図3）

「むろん，君，ビーヴァーブルック卿は正しい。平和を確保する唯一の手だては，万人に多量の武器をあたえて，とことん勝負をつけさせることなのじゃ」[23]（図4）

「むろん，君，フィーヴァーブルック卿は正しい。教育はやめるべきじゃ。民衆が文字を読めなければ，不況のことなど知らずにすむ。自信も取りもどせるというものじゃ」[24]（図5）

「むろん，君，リヴァービアー卿は正しい。インドの原住民どもにわれわれは説明すべきなのじゃ。イギリス軍がそこにいるのはひとえにやつらが虐殺されぬよう保護してやるためなのじゃとな。それが受け容れられぬとあらば，やつらを皆殺しにしてしまうがいい」[25]（図6）

「むろん，君，ボールドウィン氏は正しい。平和の確保のためにわれわれは多量の飛行機をもたねばならぬ。さもなかったら，どうやって敵に善意のメッセージを落とすというのじゃね？」[26]（図7）

「むろん，君，バンク卿は正しい。少年たちに殺し合いの仕方を教える

図3　サウナ室でのブリンプ

「今日の社説――ブリンプ大佐本人の口から」
『イヴニング・スタンダード』1934年4月28日号

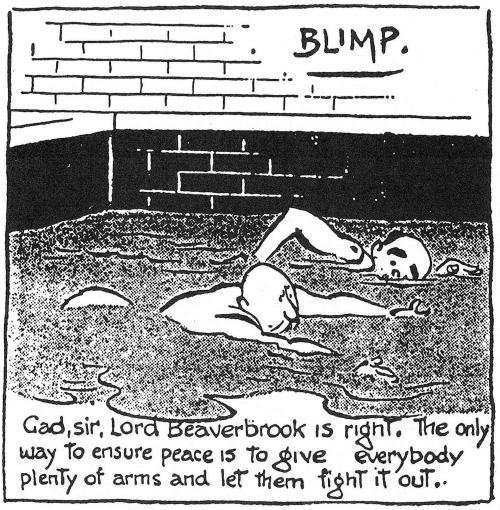

図4　水泳中のブリンプ

『イヴニング・スタンダード』1934年5月26日号

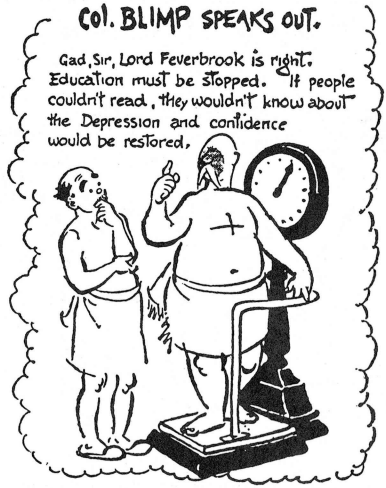

図5　体重測定中のブリンプ
「ブリンプ大佐，腹蔵なくものを言う」
『イヴニング・スタンダード』1934年6月2日号

図6　指の掃除をしてもらうブリンプ
『イヴニング・スタンダード』1934年6月23日号

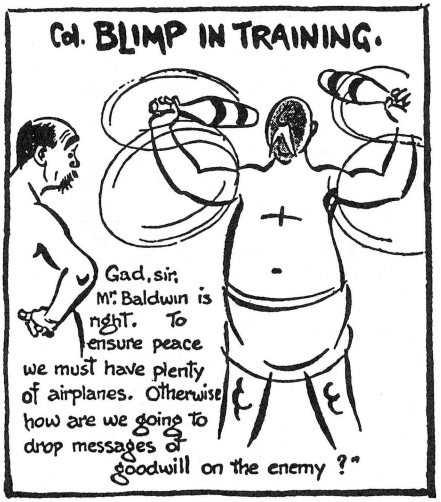

図7　トレーニング中のブリンプ大佐
『イヴニング・スタンダード』1934年8月4日号

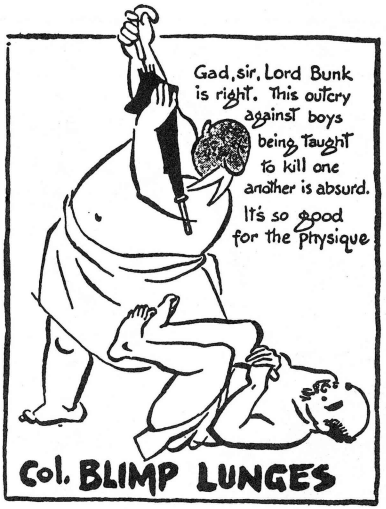

図8　ブリンプ大佐の突き
『イヴニング・スタンダード』1935年6月22日号

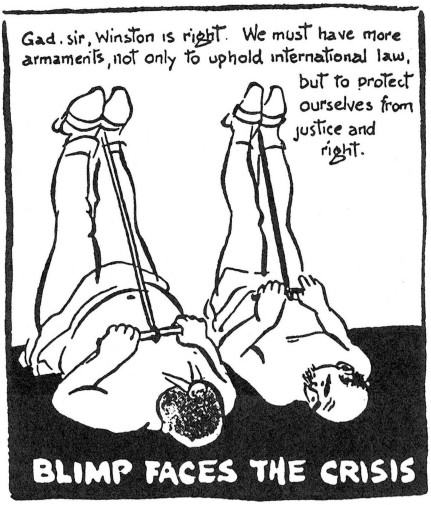

図9　ブリンプ，危機に直面

『イヴニング・スタンダード』1935年10月5日号

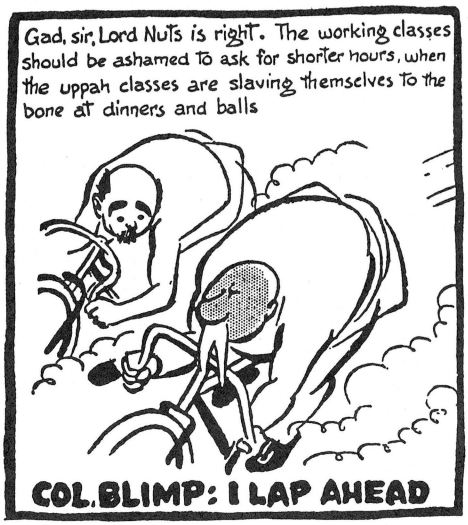

図10　ブリンプ大佐　一周リード

『ロウふたたび』1938年

のがけしからんという声は馬鹿げておる。それはきわめて体によいことなのじゃ」[27]（図8）

「むろん，君，ウィンストンは正しい。われわれは軍備を拡張せねばならぬ。それは国際法を支持するためのみならず，われわれ自身を法と正義から守るためにじゃ」[28]（図9）

「むろん，君，ナッツ卿は正しい。労働者階級の連中は労働時間短縮を要求するなど恥と思うべきじゃ。なにしろ上層階級の人間は身を粉にして晩餐会や舞踏会に出ておるのじゃからな」[29]（図10）

このように「むろん，君，～は正しい」というのがブリンプ大佐が口火を切るときの決まり文句になっている。たまに「～は間違っておる」（'...is wrong'）というのも見られるが，ほとんどが保守政治家や大実業家の実名やそれをもじった名を出して，現体制側の見解を追認する発言になっている。ただし，そうした体制側の人物が内心思っていても注意して口にしない本音や矛盾点を無邪気に暴露してしまうのがいかにもブリンプ大佐らしいところなのである。

Ⅲ　漫画的思考

以上，ロウの造形した「ブリンプ大佐」の特徴を押さえたが，つぎにオーウェルの用例をさらに数カ所あげ，オーウェルが抽象的な名詞を用いる代わりにこの漫画の登場人物名を好んで使ったことの意義を考えてみたい。

オーウェルの文で 'Blimp' を用いた最初の例と思われるのは『ウィガン波止場への道』（1937年刊，1936年執筆）の第10章においてであり，この部分は本稿の第一節ですでに引用した。つぎに引くのは論説文「スペインの内幕をあばく」（『ニュー・イングリッシュ・ウィークリー』の1937年7月29日号，9月2日号）から。スペイン市民戦争をめぐっての共産党系新聞の報道に見られる事実の歪曲を批判した一文で，その結論部分はこうなっている（以下，引用文中の「ブリンプ大佐」の用例はゴシック体で強調する）。

もしイギリスの大衆が，スペイン戦争について正しい説明を受けていたら，ファシズムとはなにか，またそれにどう戦えばよいのかについて学ぶ機会をもったであろう。だがじっさいは，経済的な空隙のなかでぐたぐた言っている**ブリンプ大佐**たちに特有の一種の殺人狂といった『ニューズ・クロニクル』〔1930年創刊の共産党系の新聞〕的なファシズム観が，以前よりいっそうしっかりと確立されてしまったのである[30]。

『カタロニア讃歌』（1938年）でオーウェルが告白しているところによると，かれ自身もスペイン市民戦争に参加する前にはそうした見方におちいっていたのだという。

私がスペインにやってきたとき，そしてそのあともしばらくのあいだ，私は政治情勢に無関心であっただけでなく，それに気がつかなかった。戦争が進んでいることはわかっていたが，どんな種類の戦争なのかまったくわからなかった。なぜ民兵部隊に加わったのかと聞かれたら，「ファシストと戦うため」と答えただろう。何のために戦っているのかと聞かれたら「普通の人間がもつ品位のため」と答えたことだろう。ヒトラーに雇われた**ブリンプ大佐**たちの軍隊が狂気の沙汰の武装蜂起をしたので，文明をそれから守ってやる，という『ニューズ・クロニクル』や『ニュー・ステイツマン』〔1913年創刊の共産党系の週刊誌〕版の戦争観を受け入れていたのだ。バルセロナの革命的な雰囲気にはとても魅了されたが，それを理解しようとはまったくしなかった[31]。

だがスペインに滞在した数ヶ月間のあいだに，「ブリンプ大佐」の旧弊な保守主義とは次元がことなる（そしてもはやそのようなカリカチュア的形象によっては表現しえぬような），この時代に特有の全体主義イデオロギーの作用に気づくことになる。

つぎもスペイン市民戦争関連。アトール公爵夫人の『スペインへの探照灯』をとりあげた書評（『ニュー・イングリッシュ・ウィークリー』1938年7月21日号）から。最後の段落に「ブリンプ」の文字が見える。

平均的なイギリス左翼はいまはよき帝国主義者であるが，彼はいまなお理屈の上ではイギリスの支配層に敵対している。『ニュー・ステイツマン』〔1913年創刊の左派の週刊誌〕を読む人々はドイツとの戦争を夢見るが，**ブリンプ大佐**を笑う必要があると考えてもいる。しかしながら，戦争がはじまると，かれらは**ブリンプ大佐**の泡立つ〔興奮した〕青い目のもとで営庭で四列縦隊を組むことになるのだろう[32]。

もうひとつは，マルコム・マガリッジの『1930年代』の書評（『ニュー・イングリッシュ・ウィークリー』1940年4月25日号）の最後の段落から。

そして〔マガリッジの本の〕終わりの数章の底にひそんでいるものが私には大変よくわかる。それは軍人の伝統のなかで育った中産階級の人間の感情であり，危機の際には自分が結局愛国者であると悟るのだ。「進歩的」であったり「めざめて」いたりすること，**ブリンプ大佐**をせせら笑い，すべての伝統的な忠誠心から自分は解放されていると公言すること――いずれもすこぶるけっこうなことではあるが，砂漠の砂が赤く染まり，イギリスよ，わがイギリスよ，われは汝ために何をなせしか，と問うときが来るのだ。私自身がこの伝統のなかで育ってきたので，おかしな具合に装われてはいても〔マガリッジに〕それがあると気づくことができるし，また共感しもする。それがたとえどんなに愚かしく，感傷的なものであっても，左翼インテリの浅薄な自己正当化よりはよほど見苦しくないものなのだから[33]。

最後の引用は，第一節で引いた『右であれ左であれ，わが祖国』のくだりと論調が似ている。じっさい，両者はほぼ同時期に書かれたもの。第二次大戦の開戦直後の状況で‘patriotism’を積極的な概念として用いている点は注目に値するところだが，これについてはべつのところである程度論じたのでくりかえさない[34]。ここではなによりも「ブリンプ大佐」の使用法に焦点をあわせなければならない。この3つの例のいずれも，「ブリンプ大佐」の主意は，まさに「保守反動の徒」であり，‘Conservative’という語で代用したとしても，大きなズレは生じないであろう。しかし前者を抽象的な言い

回しにパラフレーズすることによってある種のズレが生じることもたしかである。オーウェルの独特の物の見方を理解するヒントがここにひそんでいると私は見る。

これと関連するのが，「スペイン戦争回顧」（1943 年）に記述されたウェスカの前線でのエピソードである。スペイン市民戦争でオーウェルはPOUM〔マルクス主義統一労働者党〕に所属した。おなじ部隊にいた戦友は，前線でオーウェルがはたした指揮者としての役割と危急の際に見せた勇敢な行動を回想している。たしかに彼はすぐれた指揮能力を発揮しただけでなく，勇敢で有能な戦士であったようだ[35]。オーウェル自身，敵の塹壕に夜襲をかけた際に，逆襲を受け，危機一髪のところでみずから手榴弾を敵陣に命中させた話を『カタロニア讃歌』[36]で語っている。ところが，「スペイン戦争回顧」のなかに，ずり落ちそうなズボンをたくし上げながら走るフランコ軍兵士をオーウェルが撃てなかったという話が出てくる。多少距離があったということもあるが，オーウェルが撃たなかった理由はむしろそのズボンにあったようである。彼はこう書いている。

> 私は「ファシスト」を撃ちに来たのだった。しかしズボンをたくし上げている人間は「ファシスト」ではない。それは明らかに，私とおなじような一個の人間であって，どうしても撃つ気にはなれないのである[37]。

これが「ブリンプ」の使用法とどうつながるか。

オーウェルが「ブリンプ」という語を使う場合，たしかに彼とは敵対する，彼が有害と見なす固陋で愚劣なイデオロギーの持ち主を表す語としてつねに用いている。その連中こそが戦間期にイギリス国内での民主化を阻害し，かつ国外でのヒトラーやムッソリーニらの跳梁跋扈（ちょうりょうばっこ）を容認していたのだった（ロウはブリンプ大佐に「むろん，君，ヒトラーは正しい」「むろん，君，ムッソリーニは正しい」とまで言わせている）[38]。また第二次大戦中もかれらは効率性に欠ける旧弊な発想で「国防」を仕切ろうとしていた。それが目に余ると思ったオーウェルは，「ブリンプ大佐に国民防衛軍を台無しにさせるな」と題する論説文を書かずにはいられなかった[39]。このような点でまさしく「ブリンプ」は「頑迷な保守反動派」なのである。とはいえ，比喩の主意

(tenor) としてそれが正しいのであっても，それを乗せる媒体（vehicle）と重ね合わせることができなければ，これを十分に理解したとは言えない。カリカチュアのなかで，友人「ロウ」を相手にいかに愚かしい時代錯誤の発言を重ねていようと，サウナ風呂で裸でいるこの退役将校（退役将校であるという事実もキャプションからしかわからない）は，「保守反動」という抽象語では表現しえぬ，かなり愛すべき道化的性格を有している。私が「微妙な点で抜け落ちるもの」というのはまずこの一点にある。

オーウェルは「ブリンプ」を同時代におけるイギリスの支配階級の代名詞のように使っているわけだが，「支配者」とか「保守反動」といった抽象的な語を避け，「ブリンプ」とするのには，いくつかの重層的な意図があると思える。ひとつには，エッセイ「政治と英語」(1946 年) で説いた「相当する英語の日用語を思いつける場合には，外来の句や科学用語や専門語をけっして使うな」[40] という規則にみずから従ったということがあるだろう。当時の（そしていまに至る）知識人たちの抽象語偏重の言語使用に見られる硬直性を打破しようとする姿勢がここにもうかがわれる。また，この道化的人物を用いることによって，支配階級を笑いのめすこと，すなわち特権を享受する階層（ブリンプはアッパー・ミドル・クラスであろうが）の「価値低下」をはたす意図もあるだろう。この点はロウ自身がおこなった風刺をそのまま借用しているわけである。エッセイ「チャールズ・ディケンズ」でオーウェルが指摘した「ディケンズはバーレスク〔まじめな主題をわざとふざけて描く手法。戯作調〕への誘惑にどうしても抗うことができず，本来なら深刻であるはずのところでもかならずこれが出てしまう」[41] という特徴が自分自身にも当てはまることを明かした一例と見ることができる。さらに，これは重要なことだが，抽象語でなく生身の肉体を備えた（とイメージされる）具体的な人物像を使うことは，それを抹殺・殲滅（せんめつ）すべき反対勢力と見なすのでなく，一個の独立した人格として見る余地を残すことになる。オーウェルは当時の「平和主義者」たちとは一線を画し，暴力全般を否定したわけでは決してなかった。ガンジー風の「非暴力主義」を唱えたことなど一度もなかった。しかしながら，頑迷で旧弊な国内の支配層への言及の仕方が，「殲滅の思想」の対極にあったということは強調しておきたい。ズボンがずり落ちそうな敵兵を殺せないと思ったオーウェルは，日常的に，極力他者をそのような「人

間」として見ようとつとめたと言えないだろうか。

オーウェルには「ドナルド・マッギルの芸術」[42]という先駆的な漫画論があるが，そのエッセイにかぎらず，彼の著作の多くには「漫画的思考」と呼びたくなるような，読み手の精神のこわばりをときほぐすような性質が備わっていると私は思う。それについてはさらに詳細に検討する必要があるが，すでに紙数も尽きた。ロウが造形した「ブリンプ大佐」のイメージとオーウェルの使用法を確認したことで，本稿の目的はひとまずはたしたことになる。

なお，オーウェルはロウには面識はなかったようであるが，たがいの仕事に関心をもっていたことはたしかである。『動物農場』（1945年）刊行後まもなく，ロウがこれを読んで風刺の見事さに感銘を受け，挿絵を描く意向を表明した。オーウェルもそのプランを歓迎した[43]。だが結局この当代きっての風刺漫画家（カートゥーニスト）・戯画作者（カリカチュアリスト）による，当代きっての風刺作家の傑作の，挿絵入り版の企画は実現しなかった。じつに残念なことである。

《注》

（1） 松平千秋『ホメロスとヘロドトス』筑摩書房，1985年。

（2） ホメロス『オデュッセイア』全3巻，松平千秋訳，岩波文庫，1994年。上巻35頁。ほか随所に。

（3） オーウェル「右であれ左であれ，わが祖国」川端康雄訳，川端康雄編『象を撃つ——オーウェル評論集1』平凡社ライブラリー，1995年，55-56頁。原文は以下のとおり。'The young Communist who died heroically in the International Brigade was public school to the core. He had changed his allegiance but not his emotions. What does that prove? Merely the possibility of building a Socialist on the bones of a Blimp, the power of one kind of loyalty to transmute itself into another, the spiritual need for patriotism and the military virtues, for which, however little the boiled rabbits of the Left may like them, no substitute has yet been found.' Orwell, 'My Country Right or Left', *Folios of New Writing,* Autumn 1940; *The Complete Works of George Orwell,* edited by Peter Davison, 20 vols., London: Secker & Warburg, vols.1-9 published in 1986-87, reprinted 1998, vols. 10-20 published in 1998〔以下*CW*と略記〕, vol. 12, item 694, p. 272. 以下，本文中に日本語訳で引用したものについては，注のなかで原文を転記しておく。

（4） オーウェル『ウィガン波止場への道』土屋宏之・上野勇訳，ちくま学芸文庫，1996年，219-20頁。'If you are a bourgeois "intellectual" you too readily imagine that you have somehow become unbourgeois because you find it easy to laugh at patriotism and the C of E and the Old School Tie and

Colonel Blimp and all the rest of it. But from the point of view of the proletarian "intellectual", who at least by origin is genuinely outside the bourgeois culture, your resemblances to Colonel Blimp may be more important than your differences. Very likely he looks upon you and Colonel Blimp as practically equivalent persons; and in a way he is right, though neither you nor Colonel Blimp would admit it.' Orwell, *The Road to Wigan Pier,* London: Victor Gollancz, 1937, pp. 197–98; *CW*, vol. 5, pp. 153–54. ただし，引用文中のはじめのセンテンスで「作法」とあるのは「英国国教会」に訂正すべきである。'the C of E' は 'the Church of England' の略。「かりにブルジョア『知識人』相手に」とあるのも不正確。「ブルジョア『知識人』の場合は」ぐらいか。

（5） オーウェル『ライオンと一角獣』小野協一訳，川端康雄編『ライオンと一角獣——オーウェル評論集4』平凡社ライブラリー，1995年，43頁。'The stagnation of the Empire in the between-war years affected everyone in England, but it had an especially direct effect upon two important subsections of the middle class. One was the military and imperialist middle class, generally nicknamed the Blimps, and the other the left-wing intelligentsia. These two seemingly hostile types, symbolic opposites — the halfpay colonel with his bull neck and diminutive brain, like a dinosaur, the highbrow with his domed forehead and stalk-like neck — are mentally linked together and constantly interact upon one another; in any case they are born to a considerable extent into the same families.' Orwell, *The Lion and the Unicorn: Socialism and the English Genius,* London: Secker and Warburg, 1940, p. 44; *CW*, vol. 12, item 763, pp. 404–5.

（6）「ブリンプ大佐」を知る参考資料としては，以下が有益である。Mark Bryant (ed.), *The Complete Colonel Blimp,* London: Bellew Publishing, 1991. これは200頁に満たない小冊子であるが，豊富な図版とテクストで構成されていてよくまとまっている。また，ロウの生涯と仕事全般を簡便に記述した著作としては以下がある。Colin Seymour-Ure & Jim Schoff, *David Low,* London: Secker & Warburg, 1985.

また，カンタベリのケント大学の図書館にはイギリスの風刺漫画・戯画の豊富な資料を所蔵するアーカイヴがあり，デイヴィッド・ロウ関連の一次資料も多く所蔵している（The Centre for the Study of Cartoons and Caricature, University of Kent at Canterbury)。なかでも同センターで制作したカートゥーンのデータベースは有益であり，作者名，キャラクター名，掲載紙などのキーワード検索によって図像とテクストを確認することができるようになっている。これは現在ウェッブでも公開している。メーン・ページのアドレスは以下のとおり。http://libservb.ukc.ac.uk/cartoons/main.html

（7）「小型軟式飛行船。はじめはガス袋の下に飛行機の胴体が吊られたものからなっていた。1939–45年の戦争のあいだ，この名前が防空気球に応用されることが時々あった（A small non-rigid airship orig. consisting of a gas-bag

with the fuselage of an aeroplane slung underneath; in the war of 1939–45 the name was sometimes applied to a barrage balloon)」。

(8) *'Cinematogr.* A sound-proof covering for a ciné camera. *colloq.'*

(9) **'Colonel Blimp,** a character invented by David Low (1891–1963), cartoonist and caricaturist, pictured as a rotund pompous ex-officer voicing a rooted hatred of new ideas. Hence **blimp,** a person of this type; also *attrib.'*

(10) 'Prime Minister Blimp: "Gad, sir, the Air League is right. We must oppose all proposals for the abolition of military aviation."' Evening Standard, 28 May 1934.

(11) David Low, *Low's Autobiography,* London: Michael Joseph, 1956; New York: Simon and Schuster, 1957, p. 182.

(12) 以上は Maurice Horn (ed.), *The World Encyclopedia of Cartoons,* New York & London: Chelsea House Publishers, 1980, pp. 364–65 の記載に拠る。

(13) *Ibid,* p. 364.

(14) たとえば 1918–20 年のロイド・ジョージの連立政権を風刺した双頭の「連立ロバ (Coalition Ass)」，第二次大戦後の英国労働党を象徴する「TUC〔労働組合会議〕輓馬(ばんば) (TUC Carthorse)」などがある。

(15) ロウの風刺漫画は新聞掲載分が一定量たまるとそこから選りすぐったものが単行本にまとめられた。1936 年刊行の『ロウの政治パレード』は「ブリンプ大佐とともに」という副題がついており，偶数ページはすべて「ロウズ・トピカル・バジェット」に出たブリンプ大佐の漫画が採録されている (99 点ある)。奇数ページでも時々顔を出している。David Low, *Low's Political Parade: With Colonel Blimp,* London: The Cresset Press, 1936. 続編の『ロウふたたび』でもブリンプ大佐が最も頻繁に登場する。David Low, *Low Again: A Pageant of Politics with Colonel Blimp, Hit and Muss and Muzzlet,* London: Cresset Press, 1938.

(16) *The Complete Colonel Blimp,* p. 18. Colin Seymour-Ure の 'Introduction' より。

(17) C. S. ルイスは 1944 年にこう書いている。「両大戦間におけるイギリス人の気質を示す最も特徴的な表現を示せと言われたら，未来の歴史学者は躊躇することなくこう答えるのではあるまいか。『ブリンプ大佐』，と (It may well be that the future historian, asked to point to the most characteristic expression of the English temper in the period between the two wars, will reply without hesitation, 'Colonel Blimp')」。C. S. Lewis, 'Blimpophobia', *Time and Tide,* 9 September 1944; Mark Bryant (ed.), *The Complete Colonel Blimp,* p. 152.

また，第二次大戦中には「ブリンプ大佐」を主人公にした映画『ブリンプ大佐の生涯』がイギリスで制作され，1943 年に公開され好評を得た。制作・シナリオ・監督をマイケル・パウエルとエメリク・プレスバーガーが共同で手が

け，主演はロジャー・リブシー。デボラ・カー，アントン・ウォルブルックらが共演。3つの戦争を経験し，3人の女性と恋愛するこの映画版の「ブリンプ」（クライヴ・キャンディという役名）は，哀愁に満ちたキャラクターであるという点でロウの漫画とは異質である。この映画によって，「ブリンプ」像の変容が生じたといえる（cf. Julia Cresswell, *Dictionary of Allusions,* Glasgow: Harper Collins, 1997, p. 33)。日本では未公開だが，これは名作としてシナリオやビデオ版が出ている。Powell & Pressburger, *The Life and Death of Colonel Blimp,* edited by Ian Christie, London: Faber and Faber, 1994; A. L. Kennedy, *The Life and Death of Colonel Blimp,* London; British Film Institute, 1997. 以下はVHSビデオ版のデータ。Powell & Pressburger, *The Life and Death of Colonel Blimp,* London: An Archers Production (NP0009).

(18) ブリンプ大佐は体を鍛えることに熱心で，さまざまなスポーツをするが，逆に知性は軽視している。こんな台詞もある。「むろん，君，パンク卿は正しい。ボールドウィンは能なしかもしれぬが，本物のイギリス人なのじゃ（Gad, sir, Lord Punk is right. Baldwin may have no brains, but he's a true English man)」。*Evening Standard,* 4 July 1936.

(19) 「ブリンプを最初に着想したのは，愚かさ全般の矯正手段としてだった（[M]y original conception of Blimp had been as a corrective of stupidity in general)」。*Low's Autobiography,* p. 273.

(20) ほかでもブリンプはこの語をくりかえしている。「むろん，君，バンカム卿は正しい。光栄ある孤立じゃ，君！　われわれは干渉を受けることなくみずから各人と戦うことを主張せねばならぬ（Gad, sir, Lord Bunkum is right. Splendid isolation, sir! We must insist on fighting everybody ourselves without interference)」。*Evening Standard,* 23 February 1935.

(21) *The Complete Colonel Blimp,* p. 24. *OED*[2] の 'Gad' の項目では1875年までの用例（'If either of the young dogs wants to quarrel, by gad, sir, he shall quarrel with me.'）があげられており，それ以後のものは出ていない。ただしすでに言及した 'Blimp' の項目には1934年の 'Colonel Blimp' の用例のなかに 'Gad, sir' が見える。1934年以降は，'Gad, sir'といえば，即 'Colonel Blimp' の漫画がイギリス人には連想できたのであろうから。'Gad' の項目にこれが出ていないのはひとつの遺漏ではあるまいか。比類のない素晴らしい辞典であって文句を言うのは義理に反するとはいえ，「低級」なテクストに関して例文を拾いそこなっている例が *OED* にたまに見られるということは指摘しておかねばならない。

(22) 'Gad, sir, Lord Beaverbrook is right! If we spend so much on Peace how can we afford to buy battleships?' *Evening Standard,* 28 April 1934.

(23) 'Gad, sir, Lord Beaverbrook is right. The only way to ensure peace is to give everybody plenty of arms and let them fight it out.' *Evening Standard,* 26 May 1934.

(24) 'Gad, sir, Lord Feaverbrook is right. Education must be stopped. If people couldn't read, they wouldn't know about the Depression and confi-

dence would be restored.' *Evening Standard,* 2 Jun 1934.

(25) 'Gad, sir, Lord Reverbeer is right. We should explain to the natives in India that British troops are there only to protect them from massacre, and if they don't accept that, then shoot 'em all down.' *Evening Standard,* 23 June 1934.

(26) 'Gad, sir, Mr. Baldwin is right. To ensure peace we must have plenty of airplanes. Otherwise how are we going to drop messages of goodwill on the enemy?' *Evening Standard,* 4 August 1934.

(27) 'Gad, sir, Lord Bunk is right. This outcry against boys being taught to kill one another is absurd. It's so good for the physique.' *Evening Standard,* 22 June 1935.

(28) 'Gad, sir, Winston is right. We must have more armaments, not only to uphold international law, but to protect ourselves from justice and right.' *Evening Standard,* 5 October 1935.

(29) 'Gad, sir, Lord Nuts is right. The working classes should be ashamed to ask for shorter hours, when the uppah [upper] classes are slaving themselves to the bone at dinners and balls.' *Low Again,* p. 134. 初出は *Evening Standard,* 22 May 1937. ただし初出時は台詞中の 'The working classes should be' の部分が 'The busmen ought to be' になっていた。

(30) 'If the British public had been given a truthful account of the Spanish war they would have had an opportunity of learning what Fascism is and how it can be combatted. As it is, the "News Chronicle" version of Fascism as a kind of homicidal mania peculiar to **Colonel Blimps** bombinating in the economic void has been established more firmly than ever.' Orwell, 'Spilling the Spanish Beans', *New English Weekly,* 2 September 1937, *CW*, vol. 11, item 378, p. 46.

(31) 'When I came to Spain, and for some time afterwards, I was not only uninterested in the political situation but unaware of it. I knew there was a war on, but I had no notion what kind of a war. If you had asked me why I had joined the militia I should have answered; "To fight against Fascism," and if you had asked me what I was fighting for, I should have answered; "Common decency." I had accepted the *News Chronicle* — *New Statesman* version of the war as the defence of civilisation against a maniacal outbreak by an army of **Colonel Blimps** in the pay of Hitler. The revolutionary atmosphere of Barcelona had attracted me deeply, but I had made no attempt to understand it.' Orwell, *Homage to Catalonia,* London: Secker & Warburg, 1938; *CW*, vol. 6, p. 188. オーウェル『カタロニア讃歌』都築忠七訳, 岩波文庫, 1992年, 264頁。

(32) 'The average English Left-winger is now a good imperialist, but he is still theoretically hostile to the English ruling class. The people who read the "New Statesman" dream of war with Germany, but they also think it

necessary to laugh at **Colonel Blimp.** However, when the war begins they will be forming fours on the barrack square under **Colonel Blimp's** boiled blue eye.' Orwell, 'Review of Searchlight on Spain by the Duchess of Atholl', *New English Weekly,* 21 July 1938, *CW*, vol. 11, item 469, p. 184.

(33) 'And I know very well what underlies these closing chapters. It is the emotion of the middle-class man, brought up in the military tradition, who finds in the moment of crisis that he is a patriot after all. It is all very well to be "advanced" and "enlightened," to snigger at **Colonel Blimp** and proclaim your emancipation from all traditional loyalties, but a time comes when the sand of the desert is sodden red and what have I done for thee, England, my England? As I was brought up in this tradition myself I can recognize it under strange disguises, and also sympathise with it, for even at its stupidest and most sentimental it is a comelier thing than the shallow self-righteousness of the leftwing intelligentsia.' Orwell, 'Review of *The Thirties* by Malcolm Muggeridge', *New English Weekly,* 25 April 1940; *CW*, vol. 12, item 615, pp. 151–52.

オーウェルの著作に見られるこれ以外の 'Blimp' の用例をさらにいくつか，原文のみ引いておく（これも当該箇所をゴシックで示す)。

'**Colonel Blimp** is no longer **Colonel Blimp.** And in the more soft-boiled Left-wing papers a phrase is bandied to and fro — "democratising the army." It is worth considering what it implies.' 'Democracy in the British Army', *The Left Forum,* September 1939; *CW*, vol. 11, item 568, p. 406.

'[T]he Home Guard is brought more and more under the control of **Blimps ...**' 'Our Opportunity', *The Left News,* No. 55, January 1941; *CW*, vol. 12, item 737, p. 348.

'The hatred which the Spanish Republic excited in millionaires, dukes, cardinals, play-boys, **Blimps** and what not would in itself be enough to show one how the land lay.' 'Looking Back on the Spanish War'; *CW*, vol. 13, item 1421, p. 507.

'It is true that Kipling does not understand the economic aspect of the relationship between the highbrow and **the blimp**.... In the stupid early years of this century, **the blimps,** having at last discovered someone who could be called a poet and who was on their side, set Kipling on a pedestal ...' 'Rudyard Kipling', *Horizon,* February 1942; *CW*, vol. 13, item 948, pp. 153–54.（ここでは 'the blimp(s)' と b を小文字にし，定冠詞を付して普通名詞として用いている。)

'The military commentators of the popular press can mostly be classified as pro-Russian or anti-Russian, **pro-blimp** or **anti-blimp.**' 'Notes on Nationalism', *Polemic: A Magazine of Philosophy, Psychology & Aesthetics,* No. 1, [October] 1945, *CW*, vol. 17, item 2668, p. 143.

(34) 川端康雄「オーウェル風のくらしむき」『ライオンと一角獣――オーウェル

評論集4』平凡社ライブラリー，1995年。

(35) Bernard Crick, *George Orwell: A Life,* Harmondsworth: Penguin Books, 1982, p. 324ff. バーナード・クリック『ジョージ・オーウェル——ひとつの生き方』全2巻，河合秀和訳，岩波書店，1983年，下巻，16頁以下。

(36) *CW*, vol. 6, p. 74. オーウェル『カタロニア讃歌』（前掲）110–11頁。

(37) 'I had come here to shoot at "Fascists"; but a man who is holding up his trousers isn't a "Fascist", he is visibly a fellow creature, similar to yourself, and you don't feel like shooting at him.' Orwell, 'Looking Back on the Spanish War', *CW*, vol. 13, item1421, p. 501.『象を撃つ——オーウェル評論集1』67頁。引用はこの小野協一訳を使用した。

(38) 「むろん，君，ヒトラーは正しい。各国が力をあわせるためには，どの国をむしり取るか彼に決めさせてやるしかないのじゃ（Gad, sir, Hitler is right. The nations could all pull together if only we allowed him to settle whom to pull)」。*Evening Standard,* 4 April 1936「むろん，君，ムッソリーニは正しい。ジュネーヴがどこかよそに移されるまでは，いかなる交渉もありえぬのじゃ（Gad, sir, Mussolini is right. There can be no negotiations until Geneva is moved to somewhere else)」。*Evening Standard,* 18 April 1936.

ついでながら，イギリスの漫画家でヒトラーとムッソリーニの風刺画を最も多く描いたのがロウであったということもここで言い添えておきたい。注6に言及したデータベースを検索すると，ヒトラーを描いたイギリスのカートゥーンは778点あるが，そのうちロウの作品が413点と半数以上を占めている（二番目はシドニー・ストルビ Sidney Strube で119点)。ムッソリーニのカートゥーンは全部で326点。そのうちおよそ三分の二にあたる226点がロウの手になる。両者を初めて描いたのもロウだった（ヒトラーは『イヴニング・スタンダード』1930年9月27日号。ムッソリーニは同紙の1934年6月6日号)。1939年8月（つまり第二次大戦勃発の直前）までの10年間のデータを見ると，イギリスで描かれたヒトラーのカートゥーンは255点，そのうちロウのが216点と，圧倒的に多い。ヒトラー自身がロウの漫画に不快感を表明したと言われ，開戦まで宥和政策をとっていたイギリス政府にとってこれは歓迎できぬことだった。Cf. *Low's Autobiography,* pp. 277ff.

(39) Orwell, 'Don't Let Colonel Blimp Ruin the Home Guard', *Evening Standard,* 8 January 1941; *CW*, vol. 12, item 743, pp. 362–65. これはオーウェルの著作で唯一「ブリンプ」の語をタイトルにふくむ文章である。「ブリンプ大佐」風の退役将校がイニシアティヴをとる古い地域防衛軍的な流儀は戦術的にも思想的にもまったく現状にあわず，それに代えて厳格な上下関係がない民主的な組織にするべきであること，またドイツ軍のイギリス本土上陸を想定したゲリラ戦術など，現実的な武装と軍事訓練をすべきだと主張している。

(40) Orwell, 'Politics and the English Language', *Horizon,* April 1946; *CW*, vol. 17, item 2815, no.38, p. 430. 川端康雄編『水晶の精神——オーウェル評論集2』平凡社ライブラリー，1995年，32頁。

(41) '[T]he burlesque which he is never able to resist is constantly breaking

into what ought to be serious situations.' Orwell, 'Charles Dickens', *CW*, vol. 12, item 597, p. 50. 川端康雄編『鯨の腹のなかで——オーウェル評論集3』平凡社ライブラリー，1995年，176頁。小野寺健訳，岩波文庫版『オーウェル評論集』岩波文庫，1982年，129頁。オーウェル自身がこの特徴をもつことについては，以下を参照。川端康雄『オーウェルのマザー・グース』平凡社，1998年，83頁。

(42) Orwell, 'The Art of Donald McGill', *Horizon*, September 1941; *CW*, vol. 14, item 850, pp. 23-31.『ライオンと一角獣——オーウェル評論集4』119-45頁。

(43)『動物農場』の版元であるフレドリック・ウォーバーグ宛の1945年10月17日付の手紙でオーウェルはこう書いている。「フランク・ホラビン〔ジャーナリスト・挿絵画家〕から聞いた話では，彼が『動物農場』をデイヴィッド・ロウに見せたところ，ロウはその挿絵を描きたいというようなことを言ったそうです。ほんとうに手がけてもらえるなら，大成功をおさめるでしょう。……問題は，私がロウを知らず，彼にどのように近づいたらいいかわからぬということです。彼をご存知ですか。ホラビンはこのアイデアをすでにあなたに伝えたと言っていました（I had some conversation with Frank Horrabin, who told me [he] had shown a copy of "Animal Farm" to David Low, and the latter said something suggesting he would like to illustrate it. If he would really do so this would be a winner ... The trouble is I don't know Low and don't know how to approach him. Do you know him? Horrabin said he had mentioned this idea to you)」'Orwell's Letter to Fredric Warburg', 17 October 1945; *CW*, vol. 17, item 2766, p. 313. ウォーバーグの翌日付の返信のなかに，ホラビン宛のロウの手紙が引用されている。ロウはこう書いている。「『動物農場』を楽しく拝読しました。素晴らしい風刺作品です。おっしゃるとおり，挿絵を入れたら申し分ないでしょう（I have had a good time with ANIMAL FARM — an excellent bit of satire. As you say, it would illustrate perfectly)」(*ibid.*)。だがこのあとロウの挿絵版の企画は軌道には乗らず，まもなく立ち消えになってしまった。Cf., 'Orwell's Letter to Leonard Moore', 23 February 1946; *CW*, vol. 18, item 2908, pp. 122-23.

付　記　本論は1998年度に実施した十文字学園女子大学社会情報学部の専任教員4名による共同研究「カルチュラル・スタディーズの方法論構築のための基礎的研究」において口頭発表した論考に加筆訂正を加えたものである。

I am grateful to the Centre for the Study of Catoons and Caricature, University of Kent at Canterbury, especially to Jane M. Newton, for helping me to conduct research on my project. I would like to thank Ian Angus too, who kindly suggested me the earliest reference to 'Colonel Blimp' by George Orwell.

（1999年9月29日受理）

Obstinateness of Colonel Blimp:
On the frequent use of the term 'blimp' by George Orwell

Yasuo Kawabata

Abstract

David Low (1891–1963), who is considered the greatest cartoonist and caricaturist of his time in Britain, is little known in Japan. It is true we know the term 'blimp' as a common noun, meaning 'a person, especially an old man, with very old-fashioned political ideas,' but it would be a surprise if you met a Japanese who could conjure up the exact image of Colonel Blimp, a comic character invented by Low in 1934.

George Orwell (1903–50), on the contrary, is a household name in Japan and all of his major works including essays and journalism have been translated into Japanese in the last fifty years. There are even a number of Japanese writers who show his influence, Kenzaburo Oe, Takeshi Kaiko, Saiichi Maruya, to name but a few.

It should be noted that Orwell frequently referred to '(Colonel) Blimp' or 'blimp(s)' in his writings. Arguably the earliest reference is found in *The Road to Wigan Pier* (1937): 'If you are a bourgeois "intellectual"... you find it easy to laugh at ... Colonel Blimp.' When he came to Spain during the civil war, he had accepted naively, as he confesses in *Homage to Catalonia* (1938), the simplistic view of the war as 'the defence of civilization against a maniacal outbreak by an army of Colonel Blimps in the pay of Hitler.' His concluding paragraph of 'My Country Right or Left' (1940) suggests 'the possibility of building a Socialist on the bones of a Blimp.' He even wrote an article during the Second World War entitled 'Don't Let Colonel Blimp Ruin the Home Guard' (1941).

You may recognize the 'tenor', namely the underlying idea or subject, of the metaphor (a kind of anachronistic, reactionary person) with ease by looking it up in your dictionary; you could not really grasp the

whole shades of its meaning, however, if you lack a full understanding of the 'vehicle', or the image of the comic character, whose association with the subject constitutes the metaphor. It is not too much to say that your interpretations of Orwell's references will vary depending upon how familiar you are with the image. You may consider this kind of difference trivial, but I think it is significant in that the accumulation of such trivial matters should necessarily affect your valuation of Orwell as writer and as thinker.

This is the first attempt, I believe, to introduce Colonel Blimp in Japanese in detail, with a special attention to Orwell's references to the character. Investigating the reason why Orwell preferred the term to such abstract words as 'conservative', 'reactionary' or 'intolerant' (which he would avoid if possible), I have found these references typical of the writer who wrote not only the dystopian stories but essays on British popular culture, including 'The Art of Donald McGill' (1942), believing in 'common decency' of ordinary people manifested in the very products of their culture.